

ジャーナリスト 北村 敏泰

能登半島地震の被災地・石川県輪島市で、金光教大震災救援隊が炊き出し活動を中心支援に通り続けている。地元の人々に寄り添い「また来て」と言われる深いつながりを築くことができたのは「継続性こそ人との結び付きの根本」との信仰に根差した方だ。11月10～12日の派遣に同行した。

リーダーで鶴橋教会長の金光教の救援隊は震災直後の1月6日から入り、支援が手薄だった同館での炊き出しを始めた。当初は同

寄稿

館には100人ほどが避難しており、近隣の被災者に提供、停電断水という極限状況で命をつなぐ人たちは温かい食事に大喜びした。被災者はその後、2次避難やばらばらに仮設住宅

で20回を超えた。この日の夕食はビーフピラフで約250食。昼食から全く休むこともなく手を動かしながらも、すっかり親しくなった。被災者はその後、2次避難やばらばらに仮設住宅

は温かい食事に大喜びした。被災者はその後、2次避難やばらばらに仮設住宅

苦難続く被災者に元気を

金光教大阪災害救援隊 20回超、輪島へ炊き出し

入居という事態に振り回され、人数が増減したが、毎月数回の炊き出しは、行くたびに「おかえり」と迎えられるほど人々に定着し、そのために味や食材にも徹底的にこだわる。メニューも希望を聞いて毎回変

もまだ地震で全壊した家泥や流木が突っ込んだままの惨状だ。だが栄養たっぷ

民から声がかかり、テント前に何十人も行列ができた。「配食しながら必ず皆

「元氣だよ」と親しげな会話が弾んだ。避難で離れた家族も「唯一の楽しみ」と集まり、この炊き出しが心の糧として癒やしの場となっている。

竹内さんの原点は東日本大震災で、以来、熊本地震、西日本豪雨など各地で支援を続けており「困った人を助けるのが教えの根

本。そのために私が神様に使ってもらおうのです」と宗教師としての信念を語る。支援はいわば「取次の出張版」だ。実は昨年がんを発症し「余命5年」と診断され死を覚悟した。だが「しんどくても働けるのは神様のおかげ。生きてる限り全力でやります」という。



炊き出してできた夕食を配る竹内さん(左白Tシャツ)らメンバー

参加3回目の長野さんも「何もできない自分ですが、もっと皆さんに役立つよう頑張ります」と話し、非信徒のメンバーも同じ考えを口にした。教えの根幹は、言葉による「説教」よりも、竹内さんがいのちを燃やす行いを通じてこそ伝わっているのだと実感した。